



口之津鐵道沿線案内



折図表紙

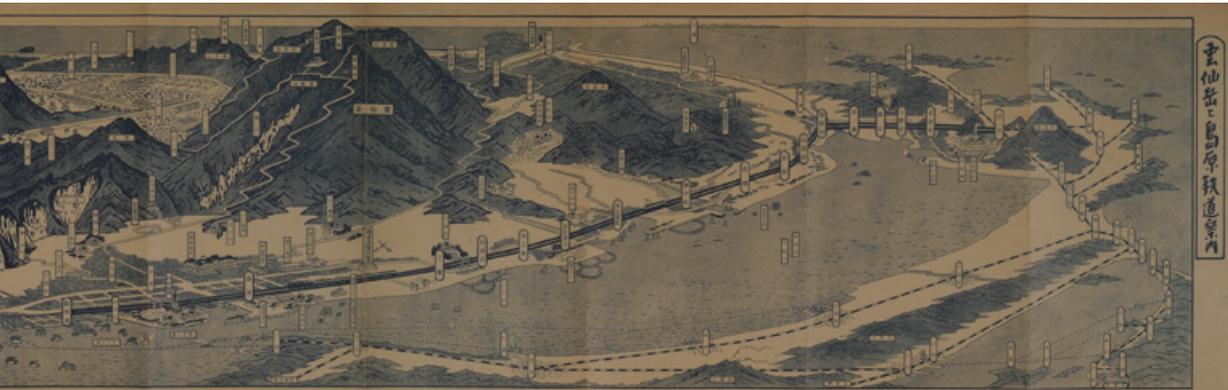


眉山と秩父ヶ浦



『雲仙岳と島原鉄道案内』

(昭和5(1930)年5月発行・昭和9(1934)年3月再版) / 島原鉄道株式会社発行 / 日本名所図絵社 印刷



雲仙岳と島原鉄道案内

# 加津佐の岩戸

## 口之津鐵道沿線案内

文・藤本一美

text by Kazumi FUJIMOTO

口之津鐵道は大正八年の創立である。大正十一年四月に島原湊(現・南島原)―堂崎駅間を開業し、同十五年には堂崎―南有馬駅間、昭和三年には南有馬―加津佐駅間が延伸開業、島原湊―加津佐駅間三十六kmの路線が全通した。

一方、島原鐵道は明治四十四年六月に本諫早―愛野村(現・愛野)駅間を開業。同年八月には本諫早―諫早駅間、同四十五年には愛野村―神代町(現・南島原)駅間の延伸によって、諫早―湊新地駅間四十二・三kmの路線が全通している。

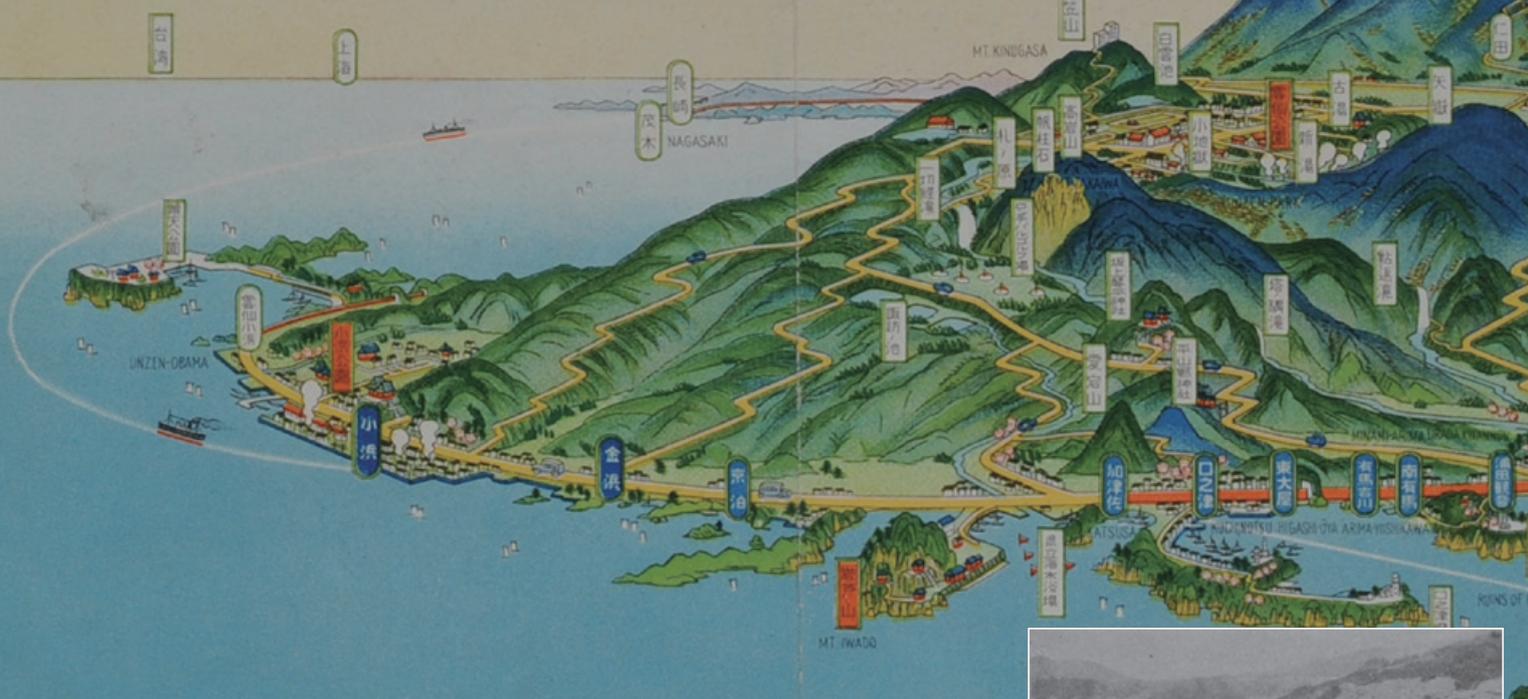
この二つの鐵道が合併、現在の島原鐵道が誕生したのは昭和十八年のことだった。しかし、平成二十年春に、島原鐵道の「南線」として親しまれた旧口之津鐵道は惜しくも廢線となり、バス路線に轉換している。

さて、本図二種、初三郎作品(上図)と旧門下生で後に最大のライバ

藤本一美

首都大学東京非常勤講師。日本国際地図学会会員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に「旅と風景と地図の科学Ⅱ」(私家版2006年)、最新刊に「展望の山50選 関東編」(東京新聞出版局)がある。

昭和十一年  
初



【加津佐の岩戸 〔口之津鉄道沿線案内〕】

(昭和11(1936)年) 書簡図絵/口之津鉄道株式会社発行/京都市内の観光社出版部 印刷



小湊全景

島原鉄道株式会社 路線図



島原鉄道株式会社

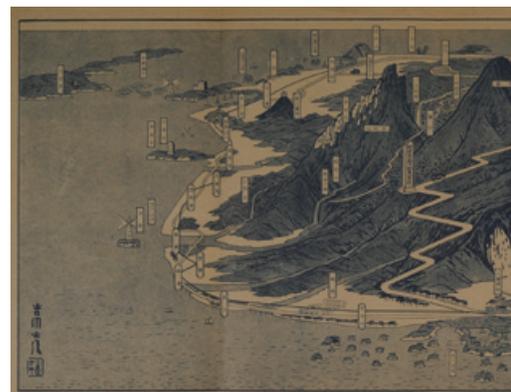
Shimabara Railroad Co., Ltd.

創立：明治41年5月5日

本社：長崎県島原市弁天町2丁目7385番地1

諫早から島原外港までを結ぶ。開業102年を迎える歴史ある路線。

102年の歴史とともに「島鉄」の愛称で親しまれる島原半島の北岸から東岸を走る43.2kmの鉄道路線。諫早駅を始点に、干拓で有名な諫早平野を抜け、200年ぶりの雲仙普賢岳噴火活動で誕生した「平成新山」の裾野を海岸線に沿って走る。終点は島原外港駅で、かつては同駅からさらに南島原市の加津佐駅までを結んでいたが、雲仙普賢岳の噴火災害と輸送人員の減少から平成20年4月1日から廃止となった。現在は、路線バスが運行している。



ルとなった金子常光作品(下図)の併用によって、昭和初期当時の両鉄道の沿線描写を試みたい。

初三郎図は、島原半島の南東、天草諸島上空から有明海越しの視点で描画。雲仙普賢岳を主峰とする火山群を核にして、高原の湯煙が上がる雲仙温泉は一大観光地。もう一つの小浜温泉は、あえて左端に曲げて入れる大胆な構図だ。太い赤線の鉄路上には、交通の要所の島原湊から有家、加津佐までの全ての駅名も表示。海岸沿いの名所、秩父ヶ浦やキリシタンの島原の乱で有名な原城址、岩戸山、さらに寛政四年の眉山の爆発・山体崩落による泥流で海中に形成した九十九島は、絶景の多島海の再現のようだ。両サイドに、小さいがカルデラの阿蘇山、遙か遠くに富士山や台湾まで入れる「遊び心」も。また、島原半島東方の宇土平島上空からの視点で描画した常光図で注目したいのは、早崎瀬戸のうず潮、眉山の崩落地と九十九島の関係、島原城址、島鉄社長銅像や蛸の名所など、沿線を巧みに表現していることだろう。

なお、島原半島を題材にした初三郎の作品には、昭和二十五年に刊行された『観光の島原半島』(島原鉄道刊)もある。